

福島区歴史研究会 会報

創刊号

2013.10

目次

発刊に寄せて・・・・・・・・・・	会長 太田勝義	1
区の花「のだぶじ」が選ばれるまで	太田勝義	2
〈戦争の記憶〉 学童疎開と空襲体験	橋 昇	4
上半期の事業		12
上半期の活動記録		12



発刊に寄せて

福島区歴史研究会 会長 太田 勝義

歴史研究会は昨年発足三十年の節目を迎え、記念誌『なにわ福島ものがたり』を発刊、記念行事も開催することができました。更に飛躍すべく、セミナーを立ち上げ、充実を図っています。加えて会員の中から、独自の研究・発表をする意欲のある方も増え、研究会の活動も含めて、総合的に記録に残すべきではないかとの気運から、当研究会の会報を発刊する事になりました。

歴史研究会の使命は「温故知新」であり、郷土の伝統と文化・歴史を守りつつ、未来を目指して歩んで行かねばならない中で、この会報がその一助となれば有難いと思います。

財政面やスタッフの関係上、立派なものではありませんが、これを契機に、当会の発展と同好の方々の方々の向上に資する事ができたら幸甚です。

将来的には、会員だけでなく、福島区の歴史に興味のある方の寄稿も掲載したいと思います。

区の花「のだふじ」が選ばれるまで

太田 勝義

福島区の花である「のだふじ」の事を記しておきたい。

初代の区の花は藤ではなかった。平成二年、「国際花と緑の博覧会」を開くに当り、大阪市は全市二十四区の区の花の選定に入った。当区も選定するに当り、福島区コミュニティ協会を中心に、昭和六十三年に「福島区の花」制定委員会が結成された。一番人気は野田藤（区の花に選定された後は「のだふじ」と称する）であったが、その場で、ある方からクレームがついた。それは、「藤は花卉が下がっている。福島区の発展を考えると縁起が悪い。」と。

突然の発言にその場は変な空気となった。

福島区では、この選定に先立つ以前から野田藤がシンボルとして区民に親しまれ、区役所の玄関には野田藤の押し花で一メートル以上もある花房が垂れ下がっていたし、区内の街角のあちこちにある住居表示の名板の色が「藤」色であったので、誰もが野田藤になると信じていたのである。

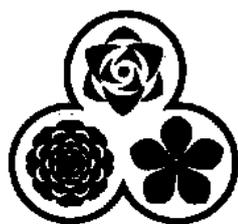
しかし選定している主催者側の筋のトップの声であるだけに、

野田藤は選ばれなかった。

それなら野田藤は一体何なのかとの議論になり、それは「野田藤は区のシンボルフラワーである。今、区の花は決めなくても良い。」という発言に押されたのであった。

他の区が選定されているのに、福島区のみが空白という事は花の博覧会を控える大阪市としては困るという事で、当区委員会は、それならば区民まつりの会場でアンケートをとることにしようという事になったが、花はあらかじめ七つが選ばれ、そこから選んでもらうというやり方で、そこには「野田藤」が無かったのである。

集計した結果は一番から三番まで大差なく、一つに絞る事が出来ず、ビンカ、マリーゴールド、バラの三つの花が選ばれ、それを合わせた図案が採用された。



この三つは得票数字とは別に四季を通じて咲き、毎日次から次と開き、丈夫であり且つ又廉価という特色があったが、福島

区のみならず、どこにでも咲いているし、さりとて、区の花にするには余りにも愛着が沸いてこないところから、区民の盛り上がりは今一つであった。奇異を感じたのは私一人ではなかったと思う。選定に無理があったのかもしれない。

一方で「のだふじ」は、「吉野の桜、野田の藤」と称されるほど、ゆかりは古く、室町幕府二代目将軍足利義詮が野田の玉川に立ち寄って、藤の花を詠んでいた事や、太閤秀吉が野田で茶会を開いていたり、江戸時代、野田の春日神社が名所となり、戦後は地元大阪福島ライオンズクラブが「野田藤」の復興に約四十年前より寄与して来たし、地元企業、寺社はじめ、区民の一鉢運動、小中高への育成活動や啓発と相まって普及活動が区全体に広がっていた時だけに、「やっぱり区の花は野田藤やで」という声が大きくなり、当区委員会は再度協議し、平成七年四月一日に「のだふじ」を「福島区の花」として、区の花の指定変更を行った。変更を行ったのは福島区以外にはない。

デザインも色合いも良く、区役所最上階壁面にも彫刻されているし、区の花指定後新築になった公共建築物である区役所ロビー、玉川小、吉野小、大開小、野田小、海老江東小にも校門正面や、体育館に藤のステンドグラス等が見える。ご一覽いた

だきたい。

この福島区をなくそうとする動きがあるだけに、福島区の花「のだふじ」もあと二年ほどの命か。寂しい思いがする。

世界的、学術的にも唯一絶対的な希少価値のある植物「のだふじ」をどう残していくか。これは区民にとっても課題となりそうである。



住居表示板下部の「のだふじ」



了徳院（浦江の聖天さん）

学童疎開と空襲体験

橋 昇

一 学童疎開

今朝NHKのテレビ（「ぴあの」）を見ていたら、私より二学年下と思われるが、当時の学童疎開に、体が不自由なため参加できず残留組で勉強をしていた事、世間では非国民扱いにされ差別を受けた事など印象を受けた。

当時学童疎開が始まった頃、私は最年長の国民学校六年生だった。昭和十九年九月に第一号として集団疎開に行き、広島県深安郡御野村にある金光教会を集団宿泊所としてお世話になった。そこから毎日四キロ程ある御野小学校に集団で通学した。

その時四年生から六年生まで、集団疎開に行けない学童が十数人ぐらい残留組として残っていた記憶がある。その学童たちは身体に何らかの問題のある子ばかりだった。残留組に残る事は、本人達にとっては屈辱であり、世間からは差別的に見られていた事は事実のようだ。

ところで私たちが集団疎開に行って一番辛かった思い出は、お腹一杯に食事が出来なかった事である。

先生からは常に「お腹が空いても辛抱しろ、戦争に勝つため

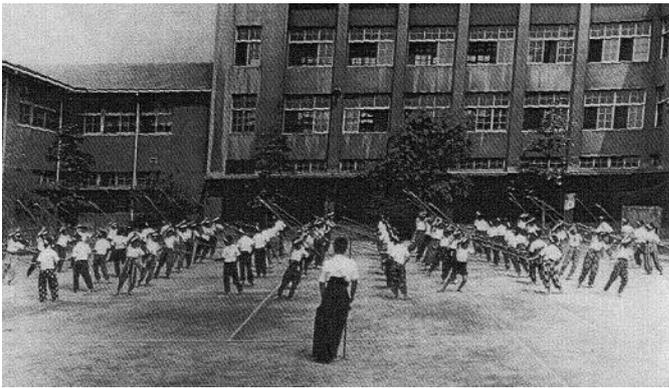
に頑張るんだ」、「戦争で兵隊さんがお国のために戦っているんだ、それを思えばどんな事でも我慢が出来る筈だ」と、このような言葉をいつも聞かされていた。

さて、集団疎開の食事の前には必ず「箸あめつちみよとらば天土御代の御恵み君と親との御恩味はへ」と全員で手を合わせて、合唱してからいただいた。この和歌は明治天皇の詩と聞かされていた。朝食はその日によって違うが、芋の入った五分粥で、昼食は大根か芋飯で、弁当箱を振れば三分の一ぐらいになってしまい、夕飯は七分目の盛切飯だった。今考えれば嘘のような話で、成長期の私にはよく耐えられたと思う。

その食糧難の集団生活で一週間に一度楽しみがあった。それは風呂焚きの当番である。なぜかというと、風呂の当番が廻ってくるまでに、夜中に畑へ行って大根や人参やさつまいも等を失敬し、それを蓄えておき、また山へ行った時には「食べたら耳が聞こえなくなるぞと」言われたどんぐりや木の实などを拾って、風呂の当番まで隠し持って、風呂焚きの時にそれを風呂当番の班員が焼いたり炒ったりして食べるのが楽しみだった。それから一カ月に三、四人ずつ両親が大阪より面会に来てくれる事になっていた。親達は食糧不足で子供達がお腹を空かし

ている事情などよくわかっているの、食べる物の差し入れがよくあった。差し入れられた食物は全部先生が受け取り、それを皆に分けてくれるが、五十人余りに分ければごく少量ずつになってしまい、ほんの口汚しに過ぎないぐらいだった。

私は親にそつと手紙を出して、食べる物をもって来たら、先生に出さずに内緒で僕に渡して欲しいと頼んでおいた。私と親との面会時には、この食糧難時代にどこで手に入れたか、お菓子やお餅や大豆の炒った食べ物を持って来て、そつと私に渡してくれた。それを仲の良い友達五人に分けて、毎晩便所や床の中で食べたものだ。それが非常にうまかった事は今でも忘れられない。



新家国民学校での薙刀の練習風景

一一 三月十三日と六月一日の大空襲

私は学童疎開より帰り、国民学校六年生を卒業してから、旧制中学に進学するため家で受験勉強に励んでいた。だから昭和二十年三月十三日の大阪大空襲にあい、空襲の恐ろしさをはじめて体験した。

その時アメリカのB29型機が大編隊を組み、その爆音を聞いたかと思えば、異様な音を立てて爆弾や焼夷弾が投下された時、身が縮む様な恐ろしい思いをしたが、幸いにして自宅は空襲を免れた。福島区では中央市場や堂島、海老江の一部が焼けて廃墟になり、私は焼け跡を見に走ったおぼえがある。

その時大勢の人々が怪我や死んだりした話を聞いて、むごい事をするアメリカに対し憎しみを感じ、この仕返しを何時かは取ってやろうと少年心ながら怒りに燃えた。

当時は軍需産業が盛んで、工業学校に人気があり、同級生の大半が工業学校に願書を出していた。私の親父は「何れこの戦争も終わる時が必ず来る。それからは商業学校のほうが役に立つ」と言っていて、当時の大倉商業学校に願書を出した。商業に入学願書を出したのは同級生では二人だけだった。願書提出は二

月だったので大倉商業が空襲で焼けるとは考えもしなかった。ところがこの空襲で進学は全校無試験で入学する事ができたが、学校が空襲にあつて、どこへ行つたら良いやら戸惑つていたら、先輩より連絡があり、今の大淀中学校だつたと思うが、仮校舎として集合がかかり、四月一日に入学することができた。

当時の大倉商業学校は今のロイヤルホテル（現在のリーガロイヤルホテル）の隣（常安町）にあつたので、十三日の空襲にはまともにやられた。

入学早々に校長先生から全員に、明日から学校の焼け跡ガレキの片付けをしてくれと頼まれて、自宅よりスコップとつるはしを持って行き、勉強もせず毎日焼け跡の片付けに二週間ほど通つた覚えがある。

それから仮校舎で勉強を始めたが、戦争も日増しに激しくなつてきて、落ち着いて勉強をする事もなかった。服装も当時軍隊の将校がかぶつていた戦闘帽子を被り、紋章は当時の若者の憧れである海軍兵学校の紋章とよく似ていて、船のイカリの形で、足にはゲートルを巻き、当時としては格好が良かったと思う。

中学校では授業で英語を教える事を国家より禁じられていたが、当校では英語の授業が特別認められていた。

教練の授業では、先生が軍人であつたので、軍事教育ばかりで、とても厳しく、態度が悪かつた私などよく木刀で殴られた。忘れもしない昭和二十年六月一日。午前中二時間目の授業で、警戒警報が発令され、間もなく空襲警報になり、近くのサイレンがけたたましく鳴り渡り、先生より避難命令が出たので教室の机の下で待機していた。飛行機の爆音が聞こえ、間近に雷の落ちてくるような音がしたので、外を見れば火花と黒煙がもうもうと上がっていた。

校内放送で学校内は危険だから外に出ろと言われ、私は防空頭巾を被り、学校の廊下を同級生数人と出口の方に走り出したが、窓から焼夷弾が二発程流れ込んできたので、手掴みで運動場に放り出してから、焼夷弾が落ちてくる中を、今のなにわ筋か出入橋場筋かはつきりしないが南の方向に逃げた。その時私のすぐ前を逃げていく中年の女性が焼夷弾の直撃を受けて倒れたので、私は一瞬怯んだが、助けておれば自分自身に危険を感じたのでそのままは走り続けた。道端では怪我をした人が防火用水にすがり、「助けて」と声を出しながら叫んでいる姿が今でも思い浮かぶ。

それから私もどこをどう走つたか無我夢中で我が家の方へ走り続けていたら、当時の国鉄の福島駅周辺の防空壕から知らな

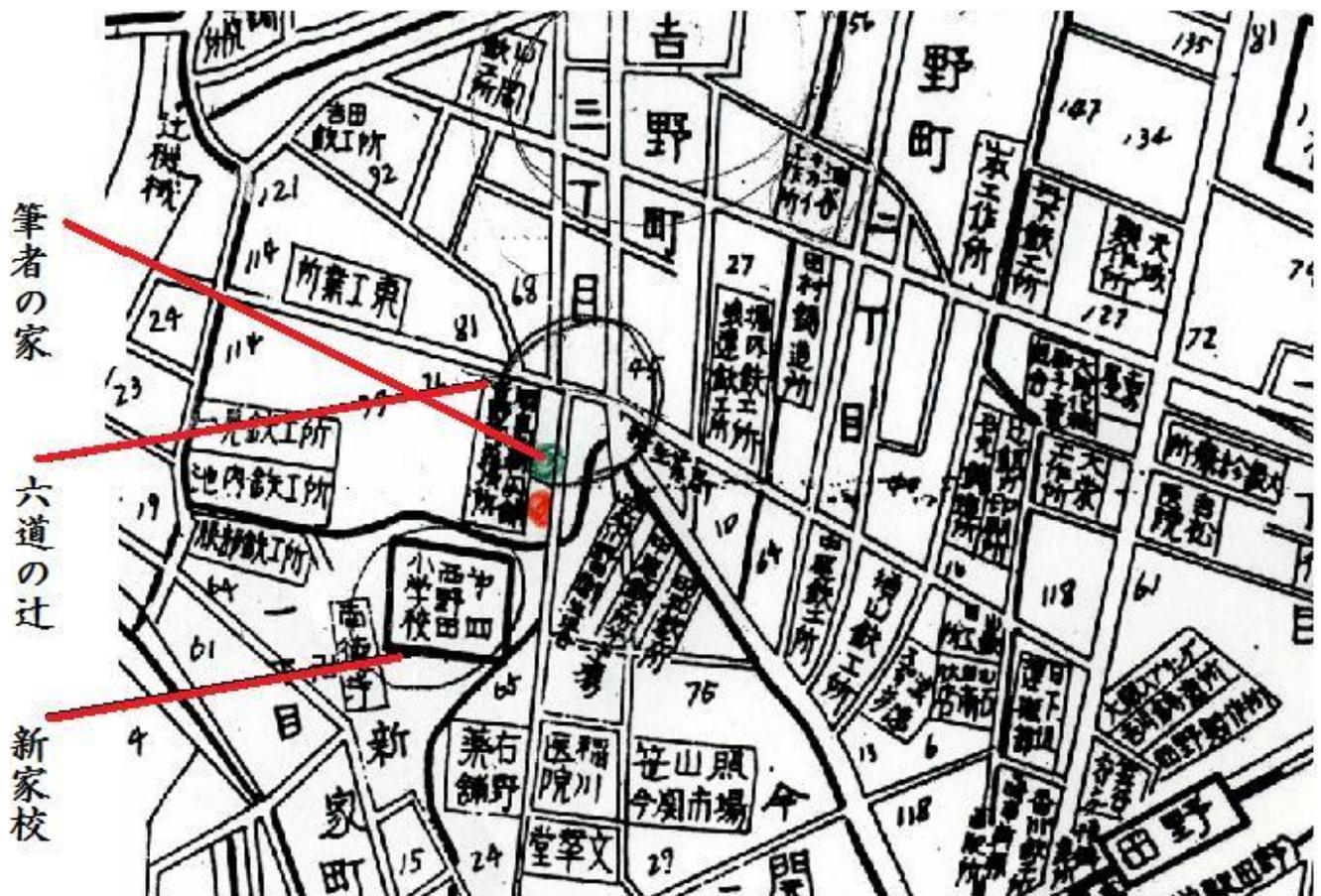
いおばさんが「その兄ちゃん外では危ないよ」と声をかけられて、「暫く空襲が下火になるまでここで待機してなさい」と言われ、約半時間ぐらい待機していた。防空壕の中には十人ぐらい子供や主婦、お年寄りが抱き合つてうずくまっていた。

やがて焼夷弾や爆音が下火になつてきたように感じたので、私は皆さんにお礼を言つて野田阪神の方へ走り続けた。野田阪神の交差点は空襲より免れた様子だったが、大勢の人々が家財道具を運んだり、大きな声で叫びながら右往左往に走っている様子が記憶に残っている。

当時私の家は吉野三丁目の六道の辻付近にあつたので、その方向を見上げれば、黒煙と火花がだんだん激しくなつてきているので、心の中は恐怖と心配で一杯だった。

逃げてきた道中で怪我人や死んだ人をもろに目撃してきたので、家族は大丈夫なのか、その時急に父母や幼い妹二人と、その日石川県から戦地で病氣をして堺の金岡病院に入院をしている兄を見舞うために、二十歳になる女性の従兄弟が来ていた、その人も無事なのかどうか、だんだん不安が募つてきた。

そんなことを考えながら、野田阪神の商店街を我が家の方向に走り出したら、正午頃にもかかわらず空は真っ黒で、十メートル先が見えないぐらい暗くなり、猛烈な雨が急に降つてきた。



昭和十年頃の筆者宅周辺の地図

しかもその雨が泥雨で衣服が黒くなり、これ以上は前に進めない状態になり、商店街の店先の軒で待機していたら、かつぱのようなものを頭から被った親子二人が走っていく姿が目にとまった。よく見ると一緒に集団疎開に行った仲良しの三宅君だった。私は一瞬藁をも掴む思いで大きな声で「三宅君」と叫んだ。三宅君はお父さんと二人で「おお、橋君、僕と一緒に来て来い」と言い、私は黙って二人の後をついて行った。

三宅君の家業は金属メッキ工場の軍需関係会社で、工場が三ヶ所あり、この度の空襲で大開工場だけが焼け残ったので、そこに行く途中だった。私は三宅君と大開工場で雨に濡れた衣服を脱いで洗濯してもらい、ストーブを焚いて衣服を乾かしながら、とりあえず休憩をとった。

ちようど私のかばんには田舎の従兄弟から土産にもらったお餅を詰めてあったので、その餅を焼いて食べながら、家の近所の空襲の様子などを聞かせてもらった。三宅君の話によると「吉野三丁目の新家校下の民家は殆ど全滅だ！あれだけひどい空襲だから死者も怪我人も相当出ている筈だ」と興奮して話をしてくれた。

私は恐る恐る「三宅君が逃げる途中に私の家族を見なかったか」と聞いた。「お母さんや妹は見掛けなかったが、君のお父さんは、空襲警報になった時警防団で待避誘導していたよ。だんだんと空襲が激しくなっ

きたので、僕達は防空壕を抜けて逃げ出し、ここへ来る途中に警防団の服装をした人が道端で数人倒れているのを見掛けたが、それから後は知らない」との返事で、私に心配をかけてはいかんと思ったのか、口を濁らせながら説明をしてきた。

かれこれ時刻も午後四時頃になったと思う。私は家族の安否も気になり、いても立ってもおれないので、取り敢えず家まで帰れば何とかなるだろうと思い、三宅君のお父さんに断って、一目散に我が家の方向へ走った。

道中は、それはひどいもので、道路の両脇にあった町工場や店舗、民家など、延焼中や、すっかり燃え尽くしてしまった建物で、元の面影など全くない。

私は、火傷をしてはいけないので、取り敢えず防空頭巾と靴を水に濡らし、それを被って手袋を口に当てやつと六道の辻まで辿り着いた。

我が家の周辺では、幼い頃より遊び慣れた場所など見る影もない。もちろん我家も無惨な姿で焼け落ちており、私は呆然と立ち竦んでいたら、近所のおじさんを見掛けて、思わず「おっちゃん」と大声を上げてしまった。「いやー！昇ちゃん無事やったんか、よかった、よかった」と私の手をきつく握り締めて、隣組の

人達が集団で避難している所に連れて行ってくれた。そこは六道の辻の角で、近所で一軒だけ焼け残った衛生組合事務所だった。私の幼い頃に、衛生組合事務所へ、蟬を取りマツチ箱にいっぱい詰めて持って行けば、いくらか忘れたが、お金をくれた思い出がある。

その衛生組合事務所は、鉄筋二階建だったので延焼を免れたようだ。

私は、急いで二階へ上り、母や妹の元気な顔を見て一瞬声を上げて泣いてしまった。又、隣組の大勢の人達も歓声をあげて私の無事を喜んで迎えてくれた。

母の話によると、空襲警報が発令されたので、父は警防団員で召集が掛って不在で、母は妹二人と従兄弟四人で防空壕に入り避難をしていたが、空襲があまりにも激しくなり、音と振動が激しく、身に危険を感じたので、防空頭巾の上から布団をかぶり、妹や従兄弟の手を引いて、焼夷弾が雨あられの如く降る中を逃げた歩いたらしい。

六道の辻より北へ行った四つ辻の角に油谷鉄工所と言う軍需工場があった。その前には直径一メートル五十ぐらいの鉄管が沢山並べてあったので、母達はその中へ入り身を潜めておったそうだと。ところで、その隣に鈴木さんの防空壕があった。鈴木さんとは日頃より

親しくしていたので、奥さんが母に「そこは危険ですの、自分の防空壕に入って来なさい」と声をかけられたらしいが、母は遠慮してその鉄管から出なかつたそうだと。空襲が終って出てみると、鈴木さんの防空壕は、焼夷弾直撃で丸焼けになり、鈴木さん一家は全員生き埋めになって焼死していた。

人間の運命は、分らないものだ。「生と死は背中合わせ」とよく言うが、この事だと思った。私の家族は、幸いにして妹が首のところには火傷をしたくらいだった。

私の家の向い側は建物疎開をした跡地だったので、そこに穴を掘って、強制疎開で家を壊した古材を使い、私と親父が一ヶ月ほどかけて、防空壕を家族の避難用と家財の倉庫用と二か所造っておいた。空襲が終って、運良くその防空壕は無事だったので、早速私は家族の下着類などを出してきて着替えたり、日常用に保管してあった乾パンなどを食べていた。

その内に親父も警防団より開放されて帰ってきて、隣組の人や家族全員が無事であった事を確め喜びあい、その夜は焼け残った衛生組合の二階で、全員一緒に一夜を過ごした。翌日には、半数以上、隣組の人達が別れを告げて親戚や知人を訪ねて出て行った。

それからが大変だった。警防団から連絡があり、防空

壕で焼死した人や生理めになった人の掘り起こしと、遺体の回収に手を貸して欲しいと言うのだ。親父は私に「お前は学校もしばらくは休校になるだろうし、警防団も手が足りないので、亡くなった人の遺体を早く処理する為に手伝いを頼む」と言った。

遺体をくるむ毛布とタンカーを大八車に積んで、警防団の人と被災現場に向かった。現場に着いて最初は、崩れ落ちた防空壕の上にあがり、土や瓦礫を落として半焼となった天井部分を皆で取り除いた。焼夷弾の直撃を受けて、防空壕が焼け落ちて六人の焼死体が埋まっているのを発見した。

最初私が目撃したのは、上半身だけしか無い焼けただれたむごい遺体だった。それから次々子供や老人の遺体が掘り起こされ、私は遺体を見ただけで手伝う気になれなかったが、警防団の皆さんが一生懸命自分たちの身内のように丁寧にあたわりながら毛布にくるんでいたの、私も素手で亡くなった人の手や足を引っ張り、土の中から引き出す作業を手伝った。

それから大八車に遺体を積み込んで、今の野田中学、当時新家国民学校（私の母校）に運んだ。正門より入って右側の職員室が遺体収容場所になってい

たので、方々から集めてきた遺体を順番に並べた。

遺体の中には、腕だけとか、足だけとか、真つ黒焦げになって男女の見分けがつかない人もあり、目玉が飛び出ている遺体を見て私は、はっと先生の言葉を思い出した。焼夷弾や爆弾が落ちてきた時には、「両手で耳と目をおさえ、口をあけて正面にうつ伏せになる事」と教えられていた。この人はそれをする事を知らなかった人だなど思った。

近所に宮川左近坊と言う浪曲師がいて、学校の講堂によく浪曲を聞きに行った。その宮川左近坊さんが、焼夷弾を胸に直撃を受けて、胸から上の部分だけが遺体で並べてあったが、下半身が無くなっていた。そんな無惨な光景は地獄絵そのものだった。今でも印象に深く残っている。

その日に学友の鈴木君に道で会い「僕の父母を見掛けたか」と聞かれ、私は返答に困り、「見なかったよ」とつらい返事をした事を覚えている。それは、私の母が、空襲の最中、鈴木君の両親が自分の防空壕に入りなさいと言われ遠慮して入らなかつたために母が助かり、鈴木君の両親が防空壕に生き埋めになって亡くなつ

た事を知っていたからだ。

少年心ながら「この戦争には必ず勝ってやる。いずれ軍人になりこの敵は取ってやる」と誓いました。国民学校の五年生の時、書道の時間に自由課題で「米英人一人残さず皆殺せ」と書いて教室の後ろに「良く出来た」と張り出された記憶もあり、当時の少年達の気持は、戦争に勝つために、お国のために、天皇陛下のために、お役に立つ事なら命を捧げるのが当然の考え方だった。

それから三日後、親父も警防団から開放され、衛生組合より守口の親戚の家に引越した。防空壕に残った家財を、衛生組合の大八車に積んで引っぱって行った。

あれから五十年を過ぎた今日、過去にそんな事が無かったかのように、何の不自由も無く平和に過ごしていけるのも、過去にこのような犠牲があったからだと思う。戦争で犠牲になった方々のためにも、我々はこの苦い経験を後世の人々に伝えていく責任があると思う。



六道の辻での防火訓練 昭和17年3月頃
(6月1日の空襲で衛生組合だけが残った)

平成六年(一九九四)の講演会「大阪大空襲と戦争を語る」(福島図書館・福島区歴史研究会共催)での話を再編集したものです

福島区歴史研究会 2013年上半期の事業

展示「大阪の古地図－福島区を中心に」 1月15日（火）～6月28日（金）



会場・福島区役所

展示「福島区70年のあゆみ」 3月8日（金）～6月30日（日）



会場・福島図書館

第8回セミナー「まぼろしの城 なにわ野田城」 3月10日（日）午後2時～

講師 藤 三郎氏 岡倉光男氏

第9回セミナー「「大阪の老舗の商人道」に学ぶ」 5月19日（日）午後2時～

講師 前川洋一郎氏

2013年 上半期の活動記録

- 1月 6日（日）18時～ 新年互歓会準備（記念誌がみやげものに 区民センター）
- 1月11日（金）9時半～ 展示準備（区役所）
- 1月17日（木）10時～ 役員会
- 2月 9日（土）17時～ 総会
- 2月14日（木）10時～ 市史編纂所へ写真採訪
- 2月17日（日）14時～ 第7回セミナー
- 2月21日（木）10時～ 企画会議
- 3月 7日（木）9時～ 展示準備（図書館）
- 3月21日（木）10時～ 企画会議
- 4月18日（木）10時～ 企画会議
- 5月16日（木）10時～ 企画会議
- 6月初め 第16回なにわ大賞応募（7月28日発表 入賞せず）
- 6月20日（木）10時～ 企画会議

